This copy has been provided by the UBC Archives [or UBC Rare Books and Special Collections] and is to be used solely for research or private study.

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

II.49

PLEASE RETAIN
ORIGINAL ORDER

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

情報　第二号　一頁　（ホープ十四哩建設委員会　高務部編輯）　一九四二、八、一九

むかし湖底のあとかとも思はれる山間の緑高地、二の木ープ十四哩農園（ホープ14MILES）の日本人町建設事業は材料が足りないながらも漸次進捗のあとを辿め住宅アパート建築に、製材所運転に、水源地水道敷設等に、夫々馬力をかけてゐる。ハストア家屋の建築も既に下工事にとりかゝつたので第二回募集人夫の日あたりには完成の運びに至らしめたい。商店の運びに至らしめたい。商店もセキユリテー委員会で経営するものでテー委員会で経営するものではないのである。

金を出えしめて建築するものではないのである。電気現在我々は木に竹を接ぐやうなものではあるが材料さへ手に入れば無料で家が建つことになる。在住者二百六十名の約八割方を一時に収容出来るやうになった。倉庫もたんくと改善されつゝある。

住宅＝今日迄に完成したもの三十棟（六十家族収容可能）は半成のその十棟、便所共も二棟に分って出来。完成家屋をキユリテー委員会無料提供のもの。ストーブは次々にすえてゐる。今週中には約五十棟は出来あがる見込、水道さへ敷設する迄は、いつでも家族迄は来る者にて、これを二時的安住の天地と為し得る、家賃十六吹メ二十六吹、小家族は二組大家族は一組、平均十八人位は住める。都市計劃のプランは別掲略図参照。

アパート＝大建物の二階全部三十室（十家族収容）が先づ出来上った。ストーブ付十一畳（二基）を二家族で使用、湯も入れる。婦女子の来着を待つてゐる。目下階下二十二室の改修工事進行中。

共同洗濯場＝既に設備は整ひ在住婦女子達はこれを使用してゐるがみと屋根を葺くだけで全く竣工。

共同風呂と便所＝男女別にして二週間前完成。

売店＝当組の如く本日より工事開始、倉庫用には鉄筋建物を取り内部改修式第必要とストックが持ち込まれる。

学校＝南天運動場＝これはバアーン（一日にバターンとなってもBC州オ一と云はれる本格的建物でその全面積は役所日本人ホールの約三倍）の二階全部を教室に仕切り、階下を雨天運動場に使用するのだがまだ工事に着手してゐない。目下二階は在住男子の寝時宿所になっており、他の施設の完成と相俟って学校工事は始められる

医療＝本週中には日本人医師が来着の筈。現在はフォースエンドで間に合はしてゐる。

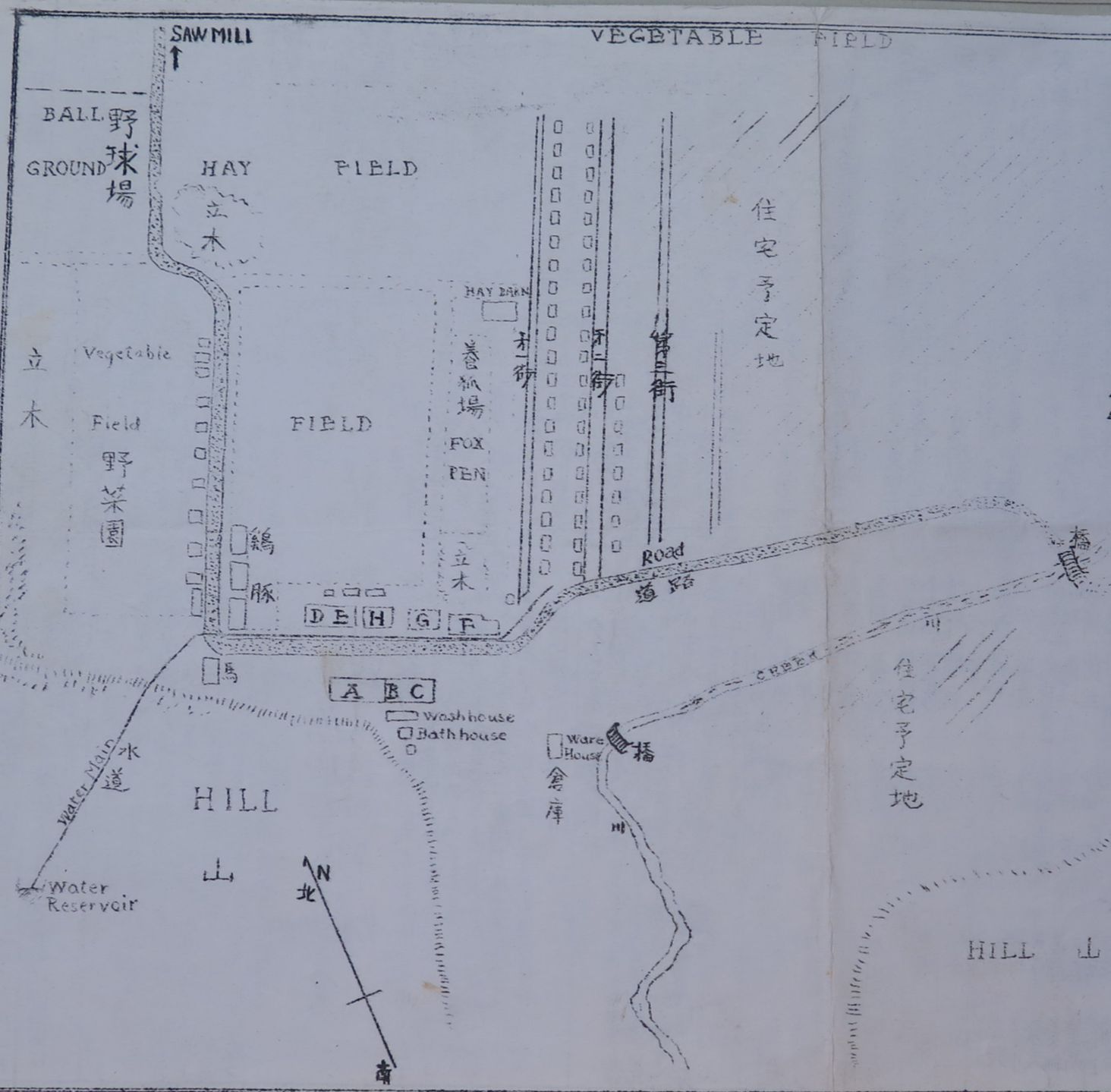
水源地＝現在でも在留者のために充分な設備はあるが都市計劃に伴ひ、大ダム工築の必要にせまられ工事進行中。その大ダム完備までには約二週間を要すると思はれる。高度三百呎の水源池が出来上れば六吋パイプを以て町へ水を引くのであるから住宅区域全面に亘る水圧は充分となみられる。昨今就働隊は真剣になって住宅区域への水道穴堀りをやってゐる。

製材所＝八月十七日から本格的運転を開始した、目下十数名就働中。

新＝＝＝

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15



俳句　到着順

殘暑拂……一等賞六

△殘暑に建ち並びゆく家の線
△殘暑や杉の葉燒き見を呼ぶ
△秋暑し體臭つよき夕餉とる
△ツラウト釣るや清流の冷へを双頬に
△ツラウト釣るや糸の彈辰偏しめり
△戰況ニュース枕灯に人聊黙しある

無題……一等賞

△陽を寄せて金地の仁王尊殘暑すこる
△扱ほめく殘暑を衝いて合掌牛組を
△建設の面白き哉秋の晴れ
△新涼や西云ふ隣りて行く夜の破蘆ト戸
△蚊口三十新涼を喰ぎこるる
△秋涼し做鰹夫寄がメもの洗ふ
△新涼を月日の木の香にひたりけり

無題……二等賞

△建設夫旦干り火に類こけて
△芒黒月我が村遠く太陽花く
常務員の帰村
△麥村へ生る希みの服を脱ぐ

無題……三等賞

△新らしき希望はもゆる本一ぷかな
△山峡に朝日かがやく理想郷
△朝りかに ひぐく谷間やつちの音

短歌

「昔」……白砂

「昔」……柴月

「昔」……清峰

タ日かげさうやくなかきく青草の
原にこもりて鳴く蛙あり
陽光に燿き映ゆる朝露野草
食む馬は湯気あげており
庭の夏草露にぬれ音がきこえ
思りきびし戰ふ兄を身近に感ず

入村者氏名一頁より つづく

北川	一雄
北川	傳一郎
濃本	七郎
西川	清太郎
信田	喜三郎
福本	正一
福本	義郎

後記「清峰荘」という名は漱石先生の命名で、我々一同暑さに負けず愉快に暮らしました。各地散在中の知人各位の御健康を祈る

A 目下就労者の宿所であるが何れ改修されてアパート又は三月少年合宿所となる

B C 小家族用のアパートで四十二家族收容可能

D 學校及びホール

E （階下）雨天運動場

F G 大食堂ストア

H 倉庫

住宅地 家と街は遠宜に区分されてゐんだんと發展して行く

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

ツラウトめ

僕は とう云う因縁か よく人里
はなれた山住をする、自分が好んで
した訳ではないが、一生の中に
よくそんな経験を
警察お寺もなく
山の中でも国立の
さてサルデーには別に
何もないので、友人を
ツラウトめ を
事を思い出して
左右、昔あった
を入れて、
粉子を一杯 揚ポケットに
釣道具と言っても
テクスにフライフックを
指にクルクルと巻いて、

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

…と込む。だ、それ丈けの仕事である。そして山の中の水林の蔭
茂みにチョロ〳〵流れる小川へ
…って流れの行々に出来て居る
水溜りに餌をまいて五六時迄
おいて…うのトを釣るのだ
ある、後も行かぬ水林の中で
ポプラやオールダーの幹の
落に夏の太陽を遮けて、林
の香を満喫しながら三、四尺の
手頃の木の枝を切って釣竿等を作
りて来に糸を括り付けて、流れ
の水面に、枠も蝶々が水に落ちた
丈たいにフライフックをおとなせて
たると、小魚がつつきに
付いて来る奴を引掛けて釣をはじめ

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

又投げる又投げつく、こんな
にして三十匹釣り上げたら
頭はその場にて捨てる
腹を開けて洗っておく。

仲間の中のつりをんが、菊菜
釜の米を少々ザーキの水で洗って
水が減をしの三吹位に三ぜ
切って椀長さを揃へ、クーキ
鍋に水に洗はれて先ほどのミーソー
や椀の根を切って来て一緒
を折り也切に煮ぜどろきド形に
立て、釜をつるし、枯木を集め
て火を焚く、釜の飯が泡を吹
く頃合に大火を弱き釣つたつりり
トをご飯の上に並べて蓋
トロ火で蒸す。

よくご飯が出来、つうりト
も煮えたのを魚の頭を二ヶ指
で交へ肉を潰し骨を頭を捨てる

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

芸作業が終ると米飯
の上に牛肉の上から煮汁を適当に
混ぜるのである。熱いうちに
は一寸風味を添へるデナーイズレディーとあんて
出来上がったものを皿に盛
る仲間はパイプレイトがあるが
待ってなし崩しで
り分けてバク付くのである。
ウスト飯が出来ると
団は手取に着を作つたり
やを作ったり
抜葉を切って地面に敷き
を作ったりを待って食事
べのてウレテ ウラウトの味は、普通
レーキおどを釣れるレンボーまウラウト
あどと違つて油は淡白
ナマ臭味が無い

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

或る時こんなことがあった。
同好三人・僕が一番上流にS君が
十間ばかり下手A君が
位の間隔をおいて
頬白の一群が チュクと木から木へ
声を漏って 声と羽音がする
樹外に葉ずれの音もしない。
太古の静寂は
俄然けたたましいSの声が
破った
「熊が出た！熊じゃー」
総の釣ってた場所は
もある大木がクリしきを
て居た共楽木の下が深くふかって
てよい釣場だった。
彼が何かの拍子に
顔を挙げると三尺程の
公が前肢を直立し

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

の上にかけ。これもキヨトとSを見ていたが祝線が合った。その瞬間の叫び声であった。

Sは喫驚して釣をはね揚げた拍子に自分の左のパンツに引掛けた。「熱だく」と叫び(実は熱心余り焦燥となって居る)。下流にいた人は、どこへやら投げ捨てポケットからマッチを出し・右足を歩調とる時のやうに揚げて(膝関節のバンツのすそでマッチを擦りの小さい火を目八分に捧げ・普火が消えぬやうに陰うにSの方へ来る。マッチが燃えつくす迄又ポケットから右脚を挙げてパンツのすそを擦りつけて陰うする「熱はとこゞ」

YAMAGA YASUTARŌ PAPERS

FOLDER NO.
3-15

「Yの方へ往きよった」「大きかったか」
「デカイ奴で赤い口を開てくさいっち」
僕は代掛子を木の間を通して
見て居たらSが瞬を殺かして・・・
猿狩りを投けようとして
て居た子は九ホドと鎖り
だが林間は尚暗いあとまで言へない
夏の日中にてツチの火を囚分に
掛けて除ける行事は一体何
の為めか
「ユーラ知らん」笑ふ心ラテレ野獣
は火を恐れる生一生
とばしてゆくれたんじゃ」
Aの説明は至極割
「ユーラもよく覚えておれ」と教へてくれた。